

所贈絶句。試誦來詩如對面。不知身既在平安。可知焉。又學茶式於千宗室。而白眉其門。余家今藏直能所製茶一。把と。平次按ずるに、直能は延寶三年に歿す。三男六女あり。長男直長七兵衛と稱し、遺跡を繼ぎ、遺知千五百石を賜はり、步頭馬廻組頭兼公事場奉行を勤め、定番頭に至り、致仕して老名を夕庵と稱し、享保十七年八十五歳にて歿す。四男四女あり。長男某九兵衛と稱し、遺知相續、寶曆三年七十六歳にて歿す。二男二女あり。長男直廉治左衛門と稱し、明和九年四十五歳にて歿す。一男一女あり。一男直温初め留之助と稱し、後哲兀郎と改稱す。泰雲公の近侍を勤め、度々咎を蒙り、家祿減少五百石となり、後二百石加恩大小姓組となり、寛政二年不行狀に依つて二百石減少、五百石となりたり。是より後歴世子孫連綿して、直賢以來朝鮮人の血統連續すといへども、家勢は稍劣れり。然りといへども實に朝鮮國より渡來せし人々多き中にも、脇田氏は名家にて、殊に直賢・直能・直長の三代は文武兼備の士なりといふべし。

○灑雪亭邸

脇田二代九兵衛直能は千宗室の門弟にて、茶人なりしゆゑに、邸内小尻谷の傍なるがけへかけ、築山・泉水などの露地を造り、茶室を建て灑雪亭と名付けたり。其の地景甚だ見事に古木生茂り、奇石奇巖そびえ、瀧などもありて世人之を賞翫す。古木多き中にも、楓は昔高尾より取寄せたりとて、一抱餘の老木四十餘本ありと。舊傳に云ふ。此の露地は二代九兵衛の時千宗室の指圖にて造らせたるなりと。按ずるに、前顯燕臺風雅に載せたる九兵衛直能傳に、錦里先生灑雪亭に遊びける時の詩に、竹樹連岩壁。軒亭據水源。飛泉陰雪灑。高榜細雲翻。と木下順庵が作れる詩語にても、園中の風景知られけり。おもふに此の園地は延寶の金澤圖に載せたる脇田九兵衛請地とある地なるべし。其の地は前顯の圖に見ゆる如く、九兵衛邸地の繼ぎなる小尻谷のがけ地なり。さて右離亭の園地明治六年十一月脇田氏住宅賣却の時悉く取拂ひ、今は其の遺跡も残らず、悉く田畠とはなりたり。

○板津權佐舊邸

延寶の金澤圖に、脇田九兵衛の向町右角をば板津權佐と記

載す。元祿六年土帳に、板津權之助小じゆり谷の下脇田九兵衛向とあり。享保九年土帳には、大小將組四百石板津齋宮小將町と載せたり。按ずるに、延寶の圖に、板津權佐邸地の向うは不破彌十郎等の居邸なるよし見ゆ。文政の金澤圖に、不破氏の向は明地とす。板津氏斷絶の後空地となりたりけん。

○板津氏傳

諸士系譜に、板津氏を載せたり。元祖を板津了甫と云ふ。利長卿被召出二百石を賜ふ。三子あり。長男を左兵衛と云ひ、三百石賜はり、曾孫喜市郎に至り、元祿年中幼少に付き三の一相續、早世斷絶す。二男は八兵衛と云ひ、四百石賜はり、是も曾孫龜之助に至り、享保十七年三の一相續、早世斷絶す。三男は盲目にて板津檢校と云ひ、光高君の時十人扶持を賜はり奉仕し、延寶七年歿す。本多政長の家士戸水某の二男作左衛門と云ふを嗣子とし、跡相續せしかど享保五年歿して跡斷絶し、遂に板津氏殘らず絶えたり。寛文二年七月兩度の由緒帳を見るに、板津八兵衛の祖父板津小三郎入道了心、先祖以來代々加賀國土着之者に而、小三

郎は越後景勝に仕へ彼地に罷在、父板津了甫は、瑞龍公初而加賀御入國の時分被召出知行二百石被下、慶長十八年死去。板津八兵衛は、微妙公寛永二年被召出二百石被下、其後二百石御加増、都合四百石拜領。兄板津檢校、甥御小姓與板津兵助、せがれ板津猪之助とあり。右板津氏は加賀國能美郡板津郷を所領せし地頭の裔孫にて、實に當國土著の士也。板津氏は富樫・林などの同族にて、尊卑分脈大系圖に、林加賀介成家子板津介成景。其子板津三郎景高。其子板津小三郎家景。承久三年爲家綱被討畢。家景弟景定、景朝。とあり。能美郡名蹟誌に云ふ。富樫介の一族石川郡林郷に林大夫成家といふあり。其の子成景といふ人能美郡板津郷に來住し、板津介と稱す。子孫板津三郎景高・同小三郎家景とて三代居住すと時代詳かならずといへども、源平合戦の前後なるべしと。又小松城考に云ふ。年代鑑と云ふ雜錄に、いにしへ小松城に以達九郎居すとあり。按ずるに、以達は板津の誤なるべしと。小松は即ち板津の郷内とす。さて板津檢校は異本微妙公夜話録に、陽廣公御相續後は何事に寄らず目錄にて小松へ御伺ひ被成たり。御使は必ず檢校共